

# 姥捨

△ 6 ▽

奥野 忠昭  
え・題字 犬童 徹

ぼくは二階へ行った。涼子はベッドの上にあぐらをかいて、横のテーブルにビール瓶をたて、大きなジョッキにビールをなみなみとついで飲んでた。泡を口いっぱいにつけ、眼の縁を赤らめて飲んでた。すでに軀から軽い臭いが出ていた。

「やってるじゃない」

「そうよ、やってるの」

涼子はひといきに半分以上飲んだ。大きな嘆息をついた。東陽が窓からガラスを刺した。

「おばあちゃんが、こんばん寝においでって言ったんだって」

「孝がそう言ってるのか。困ったことだ」

ぼくは窓から顔を出して、今、男を追っかけて行った道を眺めた。あの男、歩みながらよろけていた。それでもスピードは変えなかった。よほど疲れたふうだった。あの男の顔を見たかった。

「わたしになつかせるよう努力しますなんてかっこいいこと言ってる」

「母も淋しかったんだよ、きつと。」

「あなた、ちゃんとしなきゃ、わたしだっけ出ていきますよ。洋子さんのようにおとなしくないからね。慰謝料なんかがつっぽりもらってさ」

ぼくは空になったジョッキにビールをいっぱいいっただ。

「まあ、酒でも飲んで気でも晴らしてくれ」

子どもが上がつてきた。やややや、と腕を伸ばし、涼子の顔を指さした。

「おばちゃん、顔がまっかやで」

不思議な動物でも見るように顎からゆっくり見ていった。

「おばちゃん、おもしろい顔してるな」

「おい、ぼうず、仲よくやろな」

涼子が言った。

「おい、おばちゃん、仲よくやろな」

息子が言った。

「おばちゃん、お酒好き」

「好きじゃないわ」

「でも飲んでるやん」

「好きでなくても飲みたいときがあるの」

彼はまったくわからないというふうには首をひねった。だがそれ以上追求するつもりがないらしい。すぐに窓のところへ走っていつて外を眺めた。

「わあ、きれいに道が見えてるわ」

顔や肩は朝日で真白だ。シャワーの水ほどはねている。でも、背中が影になっている。荷物を背負っているように見える。黒色の平たい荷物だ。やつも今だけだろう。そのうち影は腹の中を滲みとおって、むこう側までとどくだろう。

「夕べ、おばあちゃんが寝においでって言ったのかい」

「ね、どうしておばあちゃんと寝たらいけないの」



Indo

「もう四年生だろう。ひとりで寝なきや」

「あっ、公園で野球している」

「今夜からひとりだぞ」

「わかっている。おばあちゃん、かわいそうやったから」

息子はそのことにはまったく関心がなかった。公園でのボールの移動に従い、眼が左右に動いた。

「ひとりでも淋しいなんて言ったらだめだぞ」

「おばあちゃん、きょうからいいののか」

「誰が言ったの」

涼子が尋ねた。

「おばあちゃんさ」

「へえ、覚悟しあはったんやろか」

「ね、なんで別々に住むの」

「おばあちゃん、ひとりで住みたいんだってさ」

「おばちゃんとけんかするからやろ」

ぼくたちは顔を見合せて笑った。ぼくの心臓は興奮した。笑ってごまかしているがまっとうに答えろと言われればどう答えていいかわからない。

「おかあさんとおばあちゃん、仲良かったの」

涼子が尋ねた。息子は答えなかった。彼なりに気を使ったのかもしれない。

「おばあちゃん、そうおっしゃってましたよ。とても仲が良かったんだって。そりゃ、最初は気も使いあったけど、最近じゃ、おかあさん、おかあさんって大事にしてくれたんだって」

「ねえ、公園へ行ってきたいい」

息子が言った。

「どうだい、この家気に入ったかい」

ぼくが言った。

「行ってきたいいわよ」

涼子が言った。

子どもはすぐ走り下りた。母と何か話し合っているふうだった。すぐ扉の開く音と軽快な足音が聞こえた。

「ほんとうかい」

ぼくが尋ねた。

「ほんとうよ」

涼子はまた酒を飲み出した。顔中が泡だらけになった。少し舌のまわりもおかしくなった。

「ほんとうにそう言ってたのよ。あなたの話とずいぶんちがうじゃない」

涼子へのあてこすりなのか、それとも本心なのか。前の顔の話から、今度の仲よしの話まで、いったい母は洋子をどう思ってたのかまったくわからなくなった。浪費癖、うそつき、母親失格、無教養……ぼくについた悪態の数々を涼子の前でみんな裏返していくなんて。信じられることではなかった。

「ずいぶん仲が悪かったみたいと言ってたけど、それほどでもなかったみたいね」

「どっちにしたって、もう関係のないことだよ」

「だから、こんどのこと、みんなあなたの責任だって」

「それはそうさ」

最初から他に責任を負わせるつもりはない。洋子が出た行ったことだって、涼子といっしょになったことだって、息子をぼくが引きとったことだって、みんな自分の責任でやったことだ。

「さあ、きょうは家のかたづけでもやるか、新しい生活の建設のために」

「ふん、家の整理ね。元気な人はやってちょうだい」

「ぼくは元気さ、なにしろ新婚家庭なんだから」

ぼくはマラソンのまねをして部屋中を走ってみ、一、二、一、二と体操のまねごとをした。そうすればどこからか力が湧いてくると思った。

「さあ、応接室からでも始めるか」

ぼくが階段を降りるとき、涼子をふりむくと涼子はまたグラスいっぱいビールをつぎ、いっしょに飲んでた。

「生理中は女が気が苛立ってかなわんな」

ぼくは声にならない声を出した。

「わたしだって、いつ洋子さんみたいになるかわかりま

せんから、覚悟していてちょうだい」

「ええ、ええ、覚悟ができていますよ、奥様」

狭い応接室の扉をいっばいにあげ、外の空気を入れようとしたが、風がなく、ただ陽だけが入ってきた。公園で遊び疲れた息子が隣りの子どもと道路で遊んでいた。

「ね、ね、おまえのおかあさん、ママ母か」

隣りの子どもが言った。

「うん、そうや」

息子が言った。

「うちのおかあさん言ってたで」

「きょうからママになったんや」

「ママって呼んでるんか」

「いいや、まだや。でも、そう呼ぶことに決めてん、ママ母やからママや」

「うまいことつけたな。いっぺん見せてくれや。ぼく、ママ母ってどんなにか見たかってん」

「うん、いいよ。あまり美人やないけれど」

「鬼みtainな顔してるか」

「どうして」

「ぼく、マンガで見たけど、そんな顔してたもん」

「あほ、ふつうの顔やで」

「へえ、ママ母って、ふつうの顔か。そんなら見てもしやないな」

「ほんとおかあさんどこへ行ったん」

「わからん、まあ、色々事情があったんや」

「のまにいか母が後ろに立っていた。紙くずのように顔をしかめ、涙をいっばいためていた。」

「むごいことや」

母はゆつくりダイニングキッチンへ行って、デコラのテーブルに坐り、また、父の写真を取り出して、両手を合せ、孝を守ってやってください、孝を守ってやってくださいと狂うようにおがんだ。

「やめろよ」



ぼくが言った。

「おまえ、かわいそうやないのか、あんなの聞いて」

「ああ、おもしろかったよ」

母は一瞬、口をあけて放心した。

「気持ち、考えたったことあるのか」

「あんまり気にしてないみたいだよ」

「ばか。なに言ってる。どんなに傷ついとるか、おまえにはわからないのや」

「かわいそうや、かわいそうや思ったら、あいつがかわいそうになる。子どもはもっと強いものです。大人よりもっと強いものです」

「おまえ親か、あの子の父親か」

「そうですよ。父親です。父親としてちゃんとやってるつもりです」

ほんとうかという声が出た。父親とは何だ。父とは何かわかっていのかという声もした。

「あの子、夕べ、もうおかあさん絶対帰ってけえへんなってわたしに言ってたんや。泣きそうな顔して」

「おかあさんが泣かしただろう」

「生きていたらないといかん、あの子が大きくなるまで生きていたらない、死なれん、絶対死なれん」

母はまた父の写真に両手をあわせ、守ってやってください、守ってやってくさいと言って狂った。

「いまはあいつがいらないけれど、帰ってきたらや



めてほしいな」

「自分の孫のこと心配するのなぜ悪い。わたしが心配してやらないと、おまえにはまかしとけん」

「孝のことはぼくがちゃんとする」

「父親だったら、女つくって、ほつき歩いたりするものか」

なんとでも言えばいい。ぼくはもう母を見ない。部屋の壁を見わたす。木板の上に布を貼った壁、布には線状の模様が縦横に走っている。まだ新しいのに古びた灰色に見えている。

涼子が置いたのか、薬瓶の中に薔薇のドライフラワーが土色の花びらをすばめている。天井からも幾本かぶらさがっている。ぼくたちが昨日ここに引っ越してくるまでにすでに涼子が先に住んでいて、暇々に造ったのだろう。丸いつぼみはまるで人の頭だ。逆さづりされた人の東がぶらさがっている。

心配なんかなくてもいいと自分に言いきかせる。

「ちょっと見てみ」

母は新聞を持ってぼくのそばへやってくる。枯枝のような腕をさし出す。ぼくはインクの臭いのする新聞を取った。

「そこるところ」

指で押える。中学生、父を刺殺、文字が眼に入る。

「その父親、子どものことほつといて、つりやヨットばかり行つてたそうや。殺したろうとずつと前から思ってたんだから」

母はお前ももう少ししたら殺されると言わんばかりだった。ぼくは読まない。大きく開けてスポーツの記録に目を這わす。だが、何の興味もわかない。どこが勝つても負けても何のつながりもない。少年のころファンだったプロチームが負けているところの点数だけをちらっと見る。大差の負けだ。きつと選手たちは何らかの感情を抱いただろう。それはぼくにはわからない。当事者にはやりきれない感情だとしてもぼくたちは冷やかに見る。

他人とはみんなそんなものだ。自分が必死で考えたとしても、他からは陳腐な出来事としか映らない。

「心臓をひと突きだつて」

母が言った。

「離婚してたのかい」

ぼくが聞く。

母は頷く。

「父親が悪いんだよ、ほんとに」

「悪いのは子どもさ」

ぼくが言う。

「世話してた父親を殺すなんて、母親を殺せばいいのに」

「勝手なんだよ、その男」

「子どもが勝手さ」

「おまえも、よう世話してやらんと……」

ぼくの心はめいる。たったこれだけのことでぼくの心は滑り落ちる。

これも母の罠だった。母のそばにいるかぎり罠はいたるところにはりめぐらされている。でも、もう少しのしんぼうだ。母を捨てる手はずがととのっている。

ぼくは外に出た。アスファルトの道はまだその原料の香りを残している。ところどころ丸く残されたアスファルトの穴から、赤土が覗き、そこに枯れかけの小さな木が葉のないまま陽を受けて、細い影をくつきり、地面に這わしている。ぼくはかなり長く、じつと佇んでいる。黄色の光が背に降りそそぐ。明るさだけが無尽蔵にあたりこぼれる。畑の草が燃えそうな息を吐く。緑色の気流があたりへ流れてくる。

ぼくは影をさがす。だが、その瘦せこけた木の影以外どこにもない。あんなに涼子のアパートは影で被われていたのに、どこからも陽があたり、白く乾いていた部屋を思い出す。いつから部屋がこんなに明るくなったのか。ぼくは明るさの中でとまどっている。

□ 第三回

# 神戸文学賞 神戸女流文学賞 作品募集

小社は昭和五十一年創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動のいっそうの発展のために微力を尽したいと願っております。第一回神戸文学賞は田摩新「島之内ブルース」、同女流文学賞は小倉弘子「ペットの背景」に、また、第二回神戸文学賞は奥野忠昭「姥捨て」、吉峰正人「生活」の二作品（同女流文学賞は該当作なし）と決まりました。ここに第三回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第であります。

## 〈募集要項〉

一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、共に西日本在住者に限ります。

一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。

一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。

一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題（創作主旨）をつけて下さい。

一、締切りは九月一日（当日消印有効）

☆なお、選考は本誌が依頼した選考委員によって行います。

一、入選発表は本誌昭和五十四年新年号誌上。同号より作品を掲載します。

一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。

一、入選作品の著作権は本誌に属します。

一、入選作品各一篇には副賞として賞金二拾万円が贈られます。

一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市生田区東町一一三の一 大神ビル七階月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。

電話〇七八―三三一―二二四六

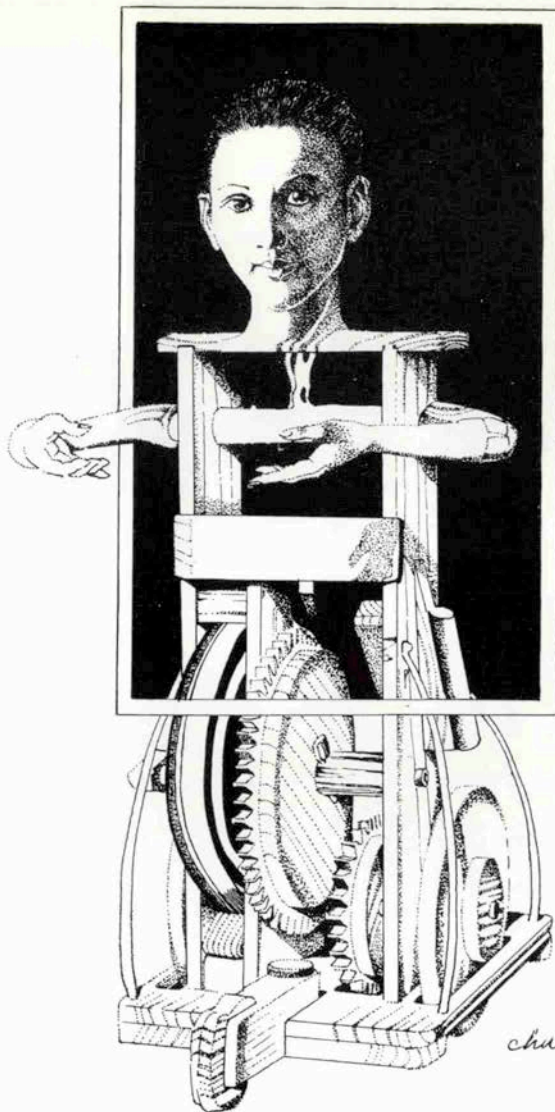
主催／月刊神戸っ子



# 生活

△第六回▽

吉峰 正人  
絵・榎 忠



それどころか、自分の子供の輝きを恐れているような  
怯えのようなものが感じられる。それにしても、この母  
親は自分の血や肉をどれほど子供に分けあたえたのか。  
それでも彼女たちは親子であることを少しも疑っていない。  
こうして一緒にいることに恐怖も戸惑いも感じてい  
ない。

子供を寝かしつけた女は立ちあがり、ぼくに近づく。  
両手に真新しい掛布団をかかえている。それを坐ってい  
るぼくの肩口にかけるが、

「疲れたでしょう。休んでください」と抑揚のない口調  
で言う。言葉に感情がない。そのことがかえってぼくを  
怯えさせる。犬や猫に喋る時だってもう少し気持ちが入  
っているものである。ぼくはその辺の置き物くらいでし  
かないのかもしれない。

「もういい加減にしようよ。こんなことがいつまでも続  
くはずがない」眠るどころではない。滅入っていく気分  
を励ましながら喋る。

「明日にしましょう。もう遅いですから。これからはい

くらでも時間がありますのよ」言いながら女はスカートの前ポケットから腰紐のようなものをとり出す。そして、布団とぼくと柱と一緒に縛りはじめる。いや、ぼくはすでに柱にくくりつけられているので布団だけをとりにければいいのだ。

「やめろ！こんなことをしたって君は決してしあわせにはなれないぞ。満足は得られないぞ。こんなものは生活じゃない」大声で叫びながら体を揺すって拒む。このまま布団にくるまって眠ることは、女の行為やこの状態を許容することになる。ぼくはそのつもりでなくても女はそう思うだろう。しかし、柱が動かない限り、ぼくはどうすることもできない。それはぼくの存在をかたくなく主張しつづけてやめない。女は細い眼の先でぼくを見ながら、

「これはりっぱな生活ですわ。私にとってはこれまでになく生きがいのある毎日になるでしょう。これからの一日一日が闊い《生活》そのものです。あなたもこの暮らしに早く馴れていただきます。いえ、きつと気に入りますわ」グイグイと体を締めつける。

こうして三日もいれば、ぼくは女の顔をすっかり覚えてしまい、彼女を妻だと思ひ込んでしまうのか。子供の仕ぐさを可愛いと感じ、眼を細めて見ながら一緒に小鼻をぶくぶくとふくらませるのか。この部屋を気に入る、一つ一つ飾り物を増やしていく楽しみを味わうのか。たえずまわりついでくる湿気や空気の重さの中に、これまでになく明確に自分を発見するのか。ばかな！そんなことがあつてたまるものか。

布団のぬくもりがぼくを包みはじめている。女はぼくから離れ、フツと溜息のようなものを背中から吐く。その後ろ姿に向かって、

「どうすればわかつてもらえるのかね？」ほんとうに尋ねたかった。わかつてもらえるならどんなことをしてもいいと思った。他の男を連れてくることで納得してもらえぬなら、どんな危険を冒してでもぼくはそうするだろ

う。しかし、女は答えず、電気のスィッチを切る。

なんと暗闇が似合う部屋なのか。全てのものが一瞬にしてその中に没し、そうすることによってより深い安堵を覚えているようである。子供の寝息はやすらかさを増し、秒針はより正確に強く動く。女は深い吐息の中にある満足感のようなものを添えて吐き出し、暗がりの奥で寝間着に着替えている。タンスも机も鏡台も全てがその中にしつくりと溶け込んでしまった。このまま永久に、光はこの部屋に戻つてこないような気がする。

「頼む！話を聞いてくれ。ロープを解いてくれ。バカヤロウ、冗談もほどほどにしな……」ぼくの声はほんとうに相手まで届いているのだろうか。それっきり女は喋らない。だからといって、こちらまで黙ってしまうわけにはいかない。渴きを訴えている喉とケンカしながら、

「おい！電気をつけろ。まだ話は終わっていないぞ。とにかくロープをほどけ。おい！こら！おいつたら……」喋っても答えるものがない恐さ。しかし、黙っていることはもっと恐ろしい。

「おい！こら！ちくしょう」声を出しつづける。が、どんなに大声をあげても、眠っている子供を起こすこともできない。おいおいがやがてオーと吠えるような唸りになる。

女は布団にすべり込む。横になった女の腰あたりに、投げだしたぼくの脚の先がある。体に結びつけられている布団はその先まで包むことができない。女は自分の掛布団をずらせてぼくの脚を隠す。生温かいぬくもりが指の間から這いあがってくる。

「おやすみなさい」ぼくの膝のあたりに軽く指をあてがい女は言う。冷えた指先がふくらはぎを撫でている。女の感触が確実にぼくを冒しはじめている。

一匹の黒い小さな虫。体の割に羽根が大きく、方向や角度や速度はどうあれ、それを動かしている限りどこへ



でも飛んで行くことができそうである。羽根を自慢に、武器に、やたら動かしては飛びつづけている。しかし、どうしたところか、羽根はどんどん大きくなり、勇ましくはばたくどころか、その広さと重みで動くことさえ困難になってきた。虫にとって飛べないということは屈辱である。そろりそろりと這っていたのでは生きていることにならないと焦躁する。まだまだ大きくなっていくそれを振り、こすり、叩き、飛ぶ。少しはあがつたようだが見事に落下。また飛びあがり、すぐ落ちる。

あのぼつと明いところが出口のようである。外に出してしまえばなんとかなりそうだ。羽根を広げ、こすりあわせる。広げるとそれはその部屋いっぱいになり、出口さえ見えなくなる。飛びあがり、落ちる。

頭を後ろからハンマーのようなもので殴られた衝撃。唾が石ころのようになって喉に落ちてくる。胃がひくつきながらそれを押し戻そうとする。戻しきれず、のみ込む。ぼくは眼さめる。はて？夜光液が塗られた時計の文字盤が見える。暗がりの中でそれは緑色に光っている。十二時のところで重なった針が、ぼくにある状態をさつさと教える。

いつの間に眠ってしまったのか。こんなはずではなかった。眠ってなんかいられない。オーオーと何故いつまでも吠えつづけていなかったのか。まさかここを気に入ったわけではあるまい。こんなことをしていたのでは女を囷にのせるだけだ。

ふと、女の手がぼくの足のくるぶしあたりに重なっていることに気づく。ほら見ろ、このなれなれしさを、おまえが甘いからだ……そんなことを言ったって、どうしようもないじゃないか……その気になれば女の一人くらいどうにでもなるさ……それがなかなか、この女、てごわいのだ……ほざくな、ははん、おまえ惚れたな……冗談じゃない、こんなことをされて、そんな気になれるものか……いや、そうとは限らない、まるっきり自分の意志が役立たないとなると逆にいい感じになるものだよ……

……ぼくには妻もいるのだ……妻だって？ そんなもの、三日も離れて暮らせば近づくことさえ恐くなるよ、一緒にいてこそなんとかやっていけるんだ……ウロウロしていれば妻が見つけてくれるよ、あいつはぼくといふことを少しも不思議がっていないのだから、いつでも平気でぼくに抱かれるのだから……彼女はそんなにはつきりしたことがわかつているのかね、人間なんて同じようなものさ、抱かれるのは恐くないからではない、そうすることによってそれから逃れようとしているのだ……少なくとも、この女は妻ではない……妻であつてもおかしくない、それなりに暮らしていけるもんだよ……

縛られていても足や手の指は動く。脚だって二本一緒にあれば少しくらいなら持ち上げることができる。腹筋はそんなに弱くない。わずかでも女を意識していることは苛立つ。言いなりになっていることは腹立つ。足の指をめたやたら人形劇の指先のように動かし、くつついた二本の脚をできる限り移動させる。

「どうかしましたの？」女が半身を起こして言う。しめたとぼくは思い、

「どうもこうも、こんな格好じゃ眠れない」同じことを何度くり返してもいい、話しを最初に戻すことだ。そこからはじめなくてはややくしくてならない。

「あら、よくおやすみになっていましたよ」言いながら女はまた膝のあたりを撫ではじめる。眠らず見張っていたというのか。

「やめてもらえないか、そんなこと」

「私の気持ちもわかってください。眠るのだからおしいくらいなんです。あなたを感じていたいのです」女の手は膝の上に這う。指を屈伸させ、脚をばたつかせ、ぼくは逃げる。が、離れない。腰をひねり、腹の肉を硬直させ……その時、ふと、尿意を感じる。

尿意……この女はどうするつもりでいるのか。生理現象という生まじめな日常をまさか忘れていたわけではあるまい。それとも、女の言う生活はそれを抜きにして成

りたつのか。彼女がこのような状態を望む限り、それはぼくにとって最も切実な問題になってくるにちがいない。そのへんのところをどうしてくれるのか。ぼくが排泄しない人間だとも思っているのか。最近是人形だってミルクを飲ませれば下から出てくるようになっていく。ぼくは人形ではない。ミルクなしでも小便是出る。そして今、したいのだ。どうしてくれる！

どうもこうも、訴えるより仕方がない。何故そんなことをいちいち言わなければならぬのか、考えていると余計にわからなくなってくる。わかっているのは、このままではどうすることもできないということだけである。それにしても女はどう処置するのか。見ものである。そのまま放っておくようなそんな薄情なことはいらないだろう。二人は夫婦なのだから。半分は何かを楽しんでいるような気分で、

「悪いけど、出そうなんだが」意気がついている割には弱々しい口調。いざとなるとなんとなく言にくい。おかしいものである。女を意識しているのか。どうでもいい相手ではないか。体裁を構うことなんかいらぬ。苦しうに訴え、困らせてやればいい。

「出そうだ！ なんとかしてくれ」ローブを解くしか方法はないだろう。少しでもゆるめたら、あとは力でねじ伏せてやろう。ぼくは身構える。小便是女を倒したあとでゆっくりとやればいい。こんなものは一人でひっそりとするものである。

「はあア？」と女は起きあがる。布団がめくれ、足元で冷気が舞う。そら見ろ、今頃あわてても遅いぞ。生活するって、そんなに簡単なものではない。まして人の生き方まで自分の思うままにしやうなんて、ふざけたことだ。ぼくはとどめを刺すように、



chu. 78



「小便がしたいのだ！」さあ、ロープを解け。

「あら、ごめんなさい。すっかり忘れていたわ。だめね、私って」女は立ちあがり、入口と反対側の戸を開ける。冷たい風が流れ込んでくる。せわしく木戸を引く音が聞こえる。きつい香料の匂いが鼻をつく。そこは便所のようなのである。暗くてよくわからないが、ちゃんと腰を曲げている女の後ろ姿が見える。何かをとり出している。どうしようというのか？

電気がつく。女が立っている。ガラスでできたシビンを持つている。中腰になりながら、

「気がつかなくてほんとうにごめんなさい」と泣きそうな眼をしてぼくを見る。体に縛りつけていた布団をめくり、シビンを股間にはめる。

「さあ、うんと出してね」サッとズボンのファスナーを降ろす。一瞬、縛られて動かないはずの体が横揺れする。なんてことだ！ 正気のさたか？ 女のその行為に何をどう感じたいのかわからなかった。侵入してきた指はびよいとペニスをつまみ、引き出す。十秒とかからなかった。

ずばらで、自分するのがめんどろな人とか、そうしするのが趣味である人とか、そうしなければ出にくい人ならともかくも、ぼくは今まで、つい先程まで、自分でつまんで放尿してきた種類の人間である。両腕のない人だって、一人でひっそりとする日常を失いたくないために、腹の筋肉の動かし方で勝手にファスナーが開き、ペニスが飛び出すような、そんな排泄方法を発見することだろう。男は立って自分でその先をつまみ、女はしゃがんでその出口を確かめながら、それはするようにできているものである。その方法が変われば全ての生活様式がその秩序を失うだろう。女は唇とペニスを持ち、男は卵巣だけを大事そうにその跡にぶら下げているようになるかもしれない。

いつもつまんでくれる指を、ペニスはちゃんと知っている。つまみ加減だって難かしいのだ。これでは出るもの

だつて止まってしまう。それにしてもなんと用意周到なのか。ぼくの誘拐は、そしてこのような生活は、早くから計画されていたようである。二重三重に鍵をかけ、ありったけの知恵をしぼって戸締まりしても、やはり泥棒はどこからか入ってきているものである。尿意を訴えることによってロープがゆるめられると考えたぼくが甘かったのか。そんな策略を女はすでに見抜いている。ぼくにとっては作戦でも彼女にはすでに日常なのかもしれない。ロープは絶対に解かない、そのことを前提に女は考え、行動しているようである。そのためであればどんなことだってするわよ、ペニスをつまみあげた女の指先はそう言っている。

ぼくは思う、シビンというものを発明したのは人を拘束したことがある奴にちがいないと。縛る側にとって、その形、持ち運びの便利さ、ガラスの透明、全てに都合よくできている。その容器に放尿する、それは透けたガラスの中に自分を陳列しているようなものである。色によって体調がわかり、量によって心理を知られ、放尿態度によって思想まで見抜かれてしまう。

腹と齒に力を入れ、こらえる。こうなったら徹底して逆らうより方法はない。女が設計した生活を壊すことだ。そのためには一滴だって出してはならない。

「どうしたの？止まっちゃったの？」女はのぞき込む。指でペニスの位置を変えながら、

「遠慮はいらないのよ。さあー」なんて楽しそうに言うのか。この女はぼくの放尿を愉快がっている。いや、ペニスそのものをおもしろがっているのだ。見ただけで、もう突きたてられたような気になっているのか。小便したら恍惚として身をよじるつもりか。そうはさせない。ぼくはこのような女に飲びの一滴もあたえるつもりはない。

(つづく)